

天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』について

—金仁謙『日東壯遊歌』との関連から—

長森美信（天理大学）

〈目次〉

はじめに

一 『東槎録』の内容

二 金仁謙『日東壯遊歌』との比較

おわりに

はじめに

天理大学附属天理図書館が所蔵する『東槎録』は、乾坤二冊の写本で、遣日本朝鮮通信使（以下、通信使）の使行録である。通信使の使行録としては『海行摠載』¹所収のものが有名だが、『海行摠載』に収録されていないものが数多くあることは周知のとおりで²、管見の限りでは、本書もまたこれまで学界に知られていなかった使行録の一つであると思われる。

本書の来歴は不明だが、昭和廿九年六月壹日の収蔵印があり、所蔵番号は乾冊2921/11/K1、坤冊2921/11/K2である。ここに「K」の文字が入っていることから見て、1954年6月以前に天理大学外国語学部朝鮮学科共同研究室が購入したのち、これを管理するための所蔵番号、図書番号（乾冊311100・坤冊311101）がそれぞれ天理図書館で付されたものらしい。現在は天理大学国際学部外国語学科韓国・朝鮮語専攻共同研究室で保存・管理されており、一般には公開していない。

大きさは縦約29cm、横約23cmで、乾冊84張、坤冊80張からなる。字体は楷書、文字数は1張あたり19文字×12行でほぼ統一されている。表紙にはそれぞれ「東槎録乾」「東槎録坤」と記されているが、内題はいずれの冊も「東行日記」となっている。

¹ 写本。全28冊。洪啓禧（1703～1771）が英祖代までの日本使行録を『海行摠載』として編集し、それを徐命膺（1716～1787）が全61冊に整理、『息坡録』と名付け、さらに第11次通信使の正使であった趙暉が自らの使行録『海槎日記』を加え、『海行摠載』全28冊としたという。1914年、朝鮮古書刊行会から影印刊行された4冊本、これを底本として刊行された『国訳海行摠載』全12冊（1967年、民族文化推進会）がある。詳細については、同書所載の解題を参照。

² 河宇鳳（1986）「새로 발견된 日本使行録들——『海行摠載』의 보충과 관련하여——」（『歴史学報』112）。ここには『海行摠載』に収録されていない使行録18篇が紹介されている。

乾冊には、癸未8月初3日から12月30日までの内容を、坤冊は甲申正月初1日から8月初7日までの内容をそれぞれ収める³。

坤冊の巻末にある名单（座目）から、このときの三使が正使趙曦、副使李仁倍、従事官金相翊であったことがわかる。つづいて「癸未八月初三日辞朝、同月二十日到釜山、十月初六日乗船、甲申正月二十八日到西京下陸、二月十六日到江戸、三月十一日回程、六月二十二日回到釜山、八月初八日復命」と、旅程が略記されており、本書が癸未年（英祖39・宝暦13・1763）の第11次（癸未／宝暦明和度）通信使の使行録であることが明らかである。

第11次通信使にかかわる記録は比較的多く、趙曦『海槎日記』、南玉『日観記』、成大中『日本録』、元重挙『乗槎録』、同『和国志』、閔恵珠『槎録』、呉大齡『東槎日記（癸未使行日記）』、李彦瑣『松穆館燼餘稿』、『癸未随槎録』などがすでに知られているが、ここに紹介する『東槎録』は、その内容から見て、上のいずれとも別個のものと考えられる。

本稿では、本書の構成と内容について大まかに紹介し、この『東槎録』が、第11次通信使に随行してハングルで『日東壯遊歌』を著した金仁謙の日本使行録である可能性について論じたい。

一 『東槎録』の内容

第10代將軍家治の襲職を祝賀するために派遣された第11次通信使は、江戸まで旅した事実上最後の使行であった。出発直前（約20日前）に三使（正使・副使・従事官）が交替するという混乱の中を出立、江戸からの帰途では正使の執事崔天宗が日本人鈴木伝蔵に殺害されるという大事件がおきた旅でもあった⁴。朝鮮にサツマイモが伝えられたきっかけがこの使行にあったこともよく知られたところである。本『東槎録』は上のような、ある意味たいへん特徴的な旅となった第11次通信使の記録である。

まずは、第11次通信使にかかわる既存の使行録について整理しておきたい。このときの使行については比較的多くの記録が確認されている。（表1）は先行研究をもとに、現存が確認されている使行録のうち、第11次通信使の記録を整理したものである。『海行摠載』に収録された正使趙曦の『海槎日記』をはじめとして、『癸未随槎録』⁵まであわせると、9名の手になる10種もの日本使行記録を今もみること

³ 史料上に見える月日は、全て旧暦のままとし、便宜上西暦を付す場合がある。以下、同じ。

⁴ 崔天宗殺害事件は日本国内にも大きな衝撃を与えた事件であった。のちにはこの話をもとに物語が創作され、芝居が作られた。歌舞伎「漢人韓文手管始」（唐人殺し）は特に有名である。崔天宗殺害事件の顛末と、この事件が物語や芝居として作りかえられていく過程、それが近世日本人の朝鮮観に与えた影響については、池内敏（1999）『唐人殺しの世界——近世民衆の朝鮮認識——』（臨川書店）を参照。

⁵ 河宇鳳、前掲論文によって紹介された『癸未随槎録』の作者は未詳とされてきたが、近年、

ができる。

〈表1〉 第11次（癸未／宝暦明和度）通信使の使行録一覧

	作者	使行時の職掌	書名	形態	所蔵先
1	趙 暉	正使	海槎日記	写本1冊	国立中央図書館
2	南 玉	正使所属製述官	日観記	写本1冊	国史編纂委員会
3	成 大中	正使所属書記	日本録	写本1冊	高麗大学校図書館
4	元 重挙	副使所属書記	乗槎録	写本4冊	高麗大学校図書館／六堂文庫
5	元 重挙	副使所属書記	和国志	写本3冊	日本・お茶の水女子大学図書館／成箕堂文庫(徳富蘇峰旧蔵)
6	閔 恵珠	副使所属軍官	槎録	写本1冊	高麗大学校図書館／六堂文庫
7	李 彦瑱	副使所属押物通事	松穆館燼餘稿	写本1冊	日本・大阪府立中之島図書館
8	金 仁謙	従事官所属書記	日東壯遊歌	写本4冊 写本2冊	ソウル大学校奎章閣／嘉藍文庫 檀国大学校図書館／淵民文庫
9	呉 大齡	従事官所属上通事	東槎日記 (癸未使行日記)	写本1冊	国立中央図書館
10	卞 琢(?)	副使所属卜船将	癸未随槎録	写本1冊	国立中央図書館

次に本書の内容を見てみよう。内題に「東行日記」とあるとおり、日記の体裁を取っており、癸未（1763・英祖39・宝暦13）年8月初3日から甲申（1764・英祖40・宝暦14／明和元）年8月初7日までの1年余りにわたって、ほぼ毎日、作者の周辺で起こった出来事が記録されている。

乾冊の全て、坤冊も大部分を日記が占め、日記部分の後ろには、正使吏曹参議趙暉以下172名、副使禦侮將軍行龍驤衛副司果李仁培以下157名、従事官禦侮將軍行龍驤衛副司果金相翊以下148名、三房合計477人の名単がある。このうち、13名が病等の理由で途中帰還、あるいは死亡したことが記されている。そのなかには崔天宗の名も見える。

次に癸未8月初3日に辞朝してから甲申8月初8日に復命するまでの日程をきわめて簡略に記したのち、良才（現ソウル特別市瑞草区良才洞）から江戸までの地名と距離を逐一あげる。ここでは漢城から釜山は陸路1020里、釜山から西京（京都）は水路3225里、西京から江戸は陸路1315里、全路程を5560里としている。

そして書契式がつづく。朝鮮国王から「日本国大君殿下」に宛てたものをはじめ

具智賢がその作者を東萊府所属の将校卞琢に比定した。具智賢（2005）「『癸未随槎録』에 대한 재검토——작가와 사행록으로서의 의미를 중심으로——」（『東方学志』131）

とするいくつかの書契の写し⁶が載せられており、その次に関白宮札単などの礼物リスト、そして日本側からの回答書契の写しが付せられている。これは同じ癸未使行の記録である趙曦『海槎日記』とも共通した、対日使行録に一般的な形式といえる。

『東槎録』の形式と内容を、〈表1〉にあげた10種の使行録の内容とそれぞれ対照してみると、本書がいずれの使行録とも別個のものであることが確認できる。

次に本書の作者を探ってみたい。その糸口となるのが、坤冊末尾に付された座目（名単）である。正使・副使・従事官の順で、子弟軍官から奴にいたるまで、三使それぞれの従人の職掌、姓名、号、本貫、生年などが細かく記されている。しかし、そのなかで一人だけ、職掌と姓しか記されていない人物がいる。従事官金相翊付の「書記進士金」である。

前近代の様々な著述において、著者が自らの姓のみを記して名を記さない例は珍しくない。この名単において名が記されていないのは、上の従事官金相翊にしたがった書記金某のみであって、彼が本書の作者である可能性は高い。

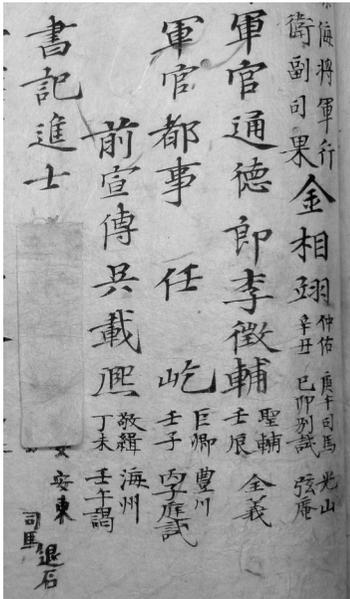
この使行において従事官付きの書記として随行した人物とえば、金仁謙である。唯一のハングル使行録として知られる『日東壯遊歌』の作者であり、朝鮮文学史上の著名人である⁷。

ところで、上述した座目の空白部分には、黒インクで「仁謙 士安、安東、己丑司馬、退石」との書き込みがある（次頁〈写真1〉〈写真2〉参照）。それぞれ金仁謙の字（士安）、本貫（安東）、司馬試の及第年（己丑）、号（退石）を示すものである。ただし、「己丑司馬」との書き込みは明らかに誤りである。金仁謙は、肅宗33（1707）年の生まれ、英祖48（1772）年に65歳で没するまでに己丑年は二度あるが、一度目は肅宗35（1709）年、二度目は英祖45（1769）年であり、どちらも非現実的である。趙曦『海槎日記』にも「字士安、丁亥生、癸酉司馬、安東人」とあるように、金仁謙の進士及第は癸酉年、すなわち英祖29（1753）年のことであった。

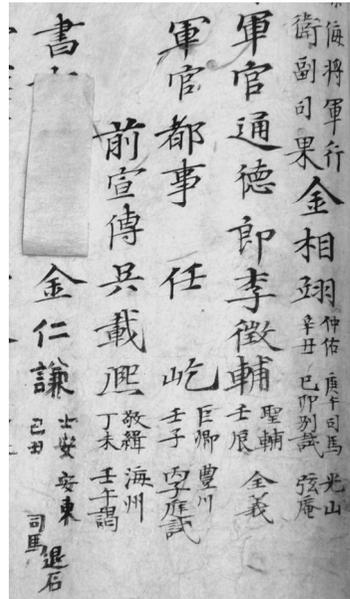
この書き込みの上には和紙（韓紙）の付箋が貼られている。少なくとも、この書き込みをした人物は「書記金某」が金仁謙であることを知っていた。当然、本書が金仁謙の著になる可能性も考えたのではなかろうか。しかし、これらがいつ、誰によって、どのような経緯で書き込まれ、そしてその上になぜ付箋が貼られたのかについては全く不明である。

⁶ 朝鮮礼曹参判李激から「日本国執政源公閣下」宛、同じく李激から「日本国近侍」宛、礼曹参議朴道源から「日本国对馬州太守拾遺平公閣下」宛、礼曹佐郎白仁煥から「日本国万年山相国寺維夫瞻長老足下」宛、「日本国对馬州沙門以酌庵足下」宛、「日本国对馬州鍾碧山万松院足下」宛など。

⁷ 『日東壯遊歌』には邦訳として、高島淑郎訳註（1999）『日東壯遊歌——ハングルでつづる朝鮮通信使の記録——』（平凡社東洋文庫）があり、詳細な解説を付す。



〈写真1〉



〈写真2〉

さて、それでは本書の作者は金仁謙であると考えてよいのだろうか。金仁謙がこのときの使行録として、ハングルの『日東壯遊歌』だけでなく、『東槎録』という漢文使行録を著していた可能性は夙に指摘されていた⁸。その根拠となったのが、成均館大学校尊經閣所蔵の李長載編『青丘稗説⁹』に収録された「退石金仁謙東槎録抄¹⁰」という文章の存在である。

高島俊郎は、『日東壯遊歌』と「退石金仁謙東槎録抄」の一部を比較し、その近似性を指摘した上で「『日東壯遊歌』は、漢文の『東槎録』を、後になってハングルの歌辞体書きかえたものと思われる」とする¹¹。具体的な記述内容をもってその点を確認してみたい。下の〈史料A〉の現代日本語訳文1～2行目および〈史料B〉の1行目は、高島が比較を行ったそれぞれの史料の該当箇所である。ここでは〈史料A〉にハングル原文を示すとともに、該当文の主述が備わるよう、3行目を加えて示した。

⁸ 高島淑郎「解説」（高島淑郎訳註、前掲書）。韓国の代表的な百科事典である『韓国民族文化大百科事典』（韓国精神文化研究院、1991年）の「金仁謙」の項目（崔康賢執筆）にも、彼の著書として『東槎録』があることが明記されている。

⁹ 成均館大学校尊經閣所蔵（請求記号 B06B・0045）

¹⁰ 「退石金仁謙東槎録抄」は、第11次使行の正使趙暉所属の書記であった成大中の子、成海応が、金仁謙『東槎録』から一部を抜粋、記録したと言う。李東燦（1996）「癸未 通信使行記録의 장르 選擧—「海槎日記」과 「日東壯遊歌」를 중심으로—」（『韓国文学論叢』18）61頁。

¹¹ 高島俊郎「解説」（前掲）401～402頁。

〈史料A〉『日東壯遊歌』第四、甲申四月初七日条
초칠일상방집스 / 대구사름최천종이 / 지문을품고서 /
제방의도라와서 / 즘드러누엇더니 / 엇더히예흔놈이 /
가슴의올나안자 / 칼로목을지른디라 (以下略)¹²

(訳) 初七日、上房執事で／大丘の人崔天宗が／開門を上役に報告した後／
自分の部屋に戻って／寝ようとしたところ／一人の倭人が／
胸の上へのしかかり／刃物で喉を突き刺した (以下略)¹³

〈史料B〉成均館大学所蔵『青丘稗説』卷三、所載「退石金仁謙所著東槎録所載
崔天宗事」
四月初七日丙戌、上房執事大丘崔天宗、稟開門還臥就寢之際、有一倭人、
拋坐腹上、以三稜刀挿咽喉 (以下略)

上の〈史料A〉〈史料B〉を比較してみれば、その内容は酷似している。〈史料A〉の「칼(刃物)」が、〈史料B〉で「三稜刀」となっている部分以外はほぼ同じであり、『東槎録』と『日東壯遊歌』が表裏一体の作品であることは明らかである。次に『東槎録』の同月同日付の記事を見てみよう。

〈史料C〉天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』坤冊、甲申四月初七日条
初七日丙戌、上房執事大丘崔天宗、稟開門還臥就寢之際、有一倭人、
拋坐腹上、以三稜刀挿咽喉 (以下略)

〈史料B〉と〈史料C〉とを比較すると、両者の記述は、完全に一致する。本書が失伝したとされてきた金仁謙著『東槎録』であることは、まず間違いないものと考えてよいだろう。

二 金仁謙『日東壯遊歌』との比較

1. 内容の比較

『日東壯遊歌』はハングルで書かれた唯一の通信使行録として、朝鮮文学史上、大きな注目を集めてきた。

ただし、全文ハングル文からなる『日東壯遊歌』を歴史資料として扱うのは決して簡単なことではない。その最も大きな理由は地名・人名などの固有名詞を特定す

¹² 『日東壯遊歌』(1974年、亜細亜文化社、ソウル) 289頁。本書はソウル大学校奎章閣嘉藍文庫本の影印。

¹³ 高島淑郎訳註『日東壯遊歌』(前掲)、325頁。

るのが困難な点にある。さらに日本の研究者にとっては、行書にちかいハングルで書かれた朝鮮近世史料を読むこと自体容易ではない。

『日東壯遊歌』の現代韓国語訳としては、沈載完訳『日東壯遊歌・燕行歌』（教文社、ソウル、1984年。以下、沈訳本）、李民樹訳『日東壯遊歌』（探求堂、ソウル、1976年）、李相玉訳「日東壯遊歌」（『18世紀歌辞全集』、民俗苑、ソウル、1991年）などがあり、邦訳には高島淑郎訳註『日東壯遊歌』（前掲。以下、高島訳本）がある。いずれも訳出、作注には相当苦心されたはずである。

以下では、固有名詞の漢字表記のことも含めて、『東槎録』と『日東壯遊歌』の内容を比較したときどのような違いが見えるのかを、ごく簡単に指摘しておく。本稿の主たる目的は、『東槎録』が金仁謙の著作であり、それが『日東壯遊歌』と深く関わる内容を持つことを指摘することにある。内容全体にわたる詳細な考察については他日を期すことにしたい。

①固有名詞などの漢字表記

〈表2〉は沈訳本および高島訳本において、固有名詞を仮に音訳したもの、あるいは不明のままに残されてカタカナで表記された部分のうち、『東槎録』によって訂正・補完が可能な例の一部を整理したものである。

〈表2〉漢字表記の訂正・不明漢字の補完（一部）

月 日	『日東壯遊歌』 沈訳本の現代韓国語訳 (高島訳本の訳)	『東槎録』 東槎録の該当箇所	備考
8/7	자종 (子鐘)	子種	音訳の誤りか
	신자익 (申資翊)	申子翊	
	陰城県監 장종시 (陰城県監チャンジョンシ)	陰城張從氏	
8/12 ~13	피골 (ピゴル)	稷谷	ともに地名。漢字表記と固有語による呼称がうかがえる。
	역골 (ヨッコル)	驛洞	
	소오미 (スエオメ)	先祖山・祖考山	沈訳には「安東郡豊山面素山の俗名」との注がある。
	오례산소 (オレの墓所)	五禮典農正祖考夫人柳氏祖妣山所	沈訳では「烏禮」の漢字を当て、「慶尚北道安東郡豊山面にある地名」との注を付す。
8/15	일낭이 (溢娘)	一娘	音訳の誤りか
8/17	윤유백 (尹庾栢)	尹綏伯 (윤수백)	影印本を見る限り、下線部の文字は「ス/予」でなく、「ユ/宥」に見える。
8/18	백희씨 (ベクヒシ)	伯楷氏	
8/22	심원뉴 (シムウォンノク)	尋院録	高島訳註本では「シムウォンノク 未詳。」としながらも「『尋

			院録』で、参拝記録の類か。」との注を付す。影印本では「ㄱ」はあるいは「ㄴ」とも読める。
9/5	다리개 (タリゲ)	多大浦	地名。多大浦の固有語読みがタリゲか。
	호두각 (虎頭閣)	虎睡閣	高島訳註本の「虎頭閣」は音訳。「多大鎮にあった睡虎閣のことか。」との注を付す。影印本では「睡」の音「ㄴ」でなく「頭」の音「두」に見えるが、「ㄴ」が正しいのであろう。

※ 全て癸未（1763・英祖39・宝暦13）年の内容。

※ 月日は『日東壯遊歌』（高島訳本）によるもの。必ずしも両書の月日は一致しない。

※ ハングル表記は沈訳本による現代韓国語表記であり、原文とは必ずしも一致しない。

〈表2〉では、ごく限られた例をあげたに過ぎないが、備考欄にも記したとおり、両書を対校することによって、人名の漢字表記（これも金仁謙による当て字かも知れないが）、地名の漢字表記と固有語による呼称が判明する。詳細については、両書の全体にわたる緻密な対校作業が必要となるが、これまで誤って訳出された部分を訂正できる可能性が明らかになった。

②日付の記載有無

次にあげられる違いは、日付の記載有無である。『日東壯遊歌』では日付の記載されていない記事が多く見られる。それに対して日記形式の『東槎録』では常に月日、天候から記述が始まるため、基本的にはどの記事でもそれがいつの内容を述べているのかがすぐにわかる。

例えば、高島訳本で、（仮に）甲申年9月21日の内容として訳出している内容が、実はその2日後の23日の話であることが確認できるし、同じく「九月二十×日」とされている記事が、同月24日のことであることが『東槎録』によって確認できる。（ともに高島訳本、108～109頁）

③内容の差異

三つめに指摘できるのは、『日東壯遊歌』に見えて、『東槎録』に見えない内容、あるいはその反対の場合があることである。

まず大きな違いとして、『東槎録』は漢城を出発する時点から記述が始まるが、『日東壯遊歌』は金仁謙の居宅があった公州から話が始まる。また終わりの部分も同様で、『日東壯遊歌』では帰国後も様々な話がつづき、公州に帰ってからの極めて個人的な「思い」もここには含まれている。それに対して『東槎録』は王への復命が終わったその瞬間に日記も終わりを告げる。

ほかにも、例えば『日東壯遊歌』癸未年8月23日から翌24日にかけての昌原妓生

雲貞を詩作の褒美に云々という話や、甲申年7月6日に訪ねてきた李ヘン（이형）という者の家に招待されて精一杯のもてなしを受けた話などは、『日東壯遊歌』にのみ見られるもので、『東槎録』には全く見えない。

それとは逆に、日本への渡海前、釜山に留まっていた癸未年10月1日、2日、4日の内容が『東槎録』ではかなりの分量を割いて記されているが、『日東壯遊歌』の記述はきわめて簡略である。

癸未年9月20日、まだ一行が出帆せずに釜山に留まっていたとき、上船（正使の船）船将の金貴栄が副使所属の書記である元重挙に無礼をはたらいたことがある。この際、金貴栄に対するお咎めが軽かったということから、正使をまきこんでのトラブルが生じた。金仁謙は、同僚である元重挙の味方につき、金貴栄に対してもっと重い処分を下してくれないのなら、日本に行かずにここで辞任するという覚悟で、正使趙曦を説得し、もとの処分よりも五倍重い刑罰を金貴栄に加えるとの裁可を導き出すのに成功した。

このときの金仁謙の正使趙曦に対する台詞、元重挙を論ずる台詞を見ると、内容はほぼ同じでありながら、『日東壯遊歌』に収められたハングル文は、『東槎録』に比べてずっと長く、表現も生き生きとしている。

これは漢文で書かれた備忘記、あるいは『東槎録』そのものを見ながら『日東壯遊歌』が歌辞として著されたことを示すものかも知れない。

全体として『日東壯遊歌』には、東槎録に比べて、生き生きとした躍動感を感じさせる記述が多い。その理由としては、漢文と歌辞という文体の違いもあるだろう。しかしあるいは、旅行をしながらのメモと、そのメモを見ながら当時の情景を浮かべつつ語られる思い出話くらいの違いが両者の間にあるのかも知れない。

2. 『東槎録』と『日東壯遊歌』

これまで見てきたように、漢文で書かれた『東槎録』とハングルで書かれた『日東壯遊歌』の内容は相当近似している。両者ははたしてどのような関係にあるのであろうか。

漢文による日記体の使行録をのこすという当時の慣習から考えても、また金仁謙自身が書記に任命されるほど漢詩文に長けていたことから考えても、使行の際に漢文でつづられた日記がまず存在した可能性は高い。それが『東槎録』なのか、それとも『東槎録』とはまた別のものがあったのかは分からない。順序としては、漢文で書かれた使行日記をもとに、全文ハングルの歌辞体で『日東壯遊歌』が書かれたと考えると大過ないと思われる。

前述したとおり、高島淑郎も『日東壯遊歌』は漢文の『東槎録』を後になってハングルの歌辞体に書きかえたものと見ているが、同時に重要な指摘をしている。

〈史料D〉『日東壯遊歌』第二、癸未十月十一日条

비우히안쟈다가 / 왜놈들을 만나보고
성명을 무러보니 / 질화도순길일쇠

(訳) 船の上に座っていると／倭人らに出会う

姓名を聞いてみると／チル樺島淳吉と答える（高島訳本、135頁）

高島は、この〈史料D〉の질/チルに付した注において次のように述べている。

「チル」は「質」、つまり「質」^{ちつ}えたであるが、あたかも名前の一部のように書かれてある。これは「質樺島淳吉」をハングルになおすときに「質」の意味がわからず名前の一部にしてしまったということであろう。つまり（金仁謙の『東槎録』などの）ハングル化には、金仁謙以外の人物もかかわったことを意味する。（高島訳本、135頁）

つまり、高島は『日東壯遊歌』が『東槎録』などの漢文使行日記をハングル化したものと前提しつつも、これを「ハングルになおすときに」金仁謙以外の人物がかかわっていた、とするのである。筆者もこの考えに首肯するところだが、〈史料D〉の「질/チル=質」とする解釈については、もう少し慎重な検討が必要かも知れない。『東槎録』の該当部分は次のとおりである。

〈史料E〉天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』坤冊、甲申四月初七日条

…伝語官適在坐、余問其姓名、對曰姓樺島名淳吉。問年紀幾許、答曰、三十五歲…

金仁謙が、たまたま船上に座っていた倭人にその姓名を問うたところ、樺島淳吉とこたえた。樺島は従事官担当の対馬藩通詞なので『東槎録』の「伝語官」という表現は適当である。さらに『東槎録』には彼の年齢にかんする問答も記されている。

ところで、ここには「對曰」とはあるものの、「質」の字は見えない。仮に「질/チル」にかんする高島の解釈が正しいとすれば、『東槎録』の記述に「質」の字が使われていないことをどのように考えればよいだろうか。『日東壯遊歌』がつけられたときに、『東槎録』以外の何かまた別の資料が存在した可能性、あるいは本『東槎録』とはまた異なる『東槎録』が存在した可能性も考えられるのである。

このように、『東槎録』と『日東壯遊歌』の内容は完全に一致するものではない。しかし、『東槎録』が『日東壯遊歌』よりも先に生まれており、これが『日東壯遊歌』の材料の一つであった可能性は、やはり高い。

『日東壯遊歌』では、『東槎録』の記事の数日分をまとめて書いている場合はあ

るが、その逆はないことがその理由の一である。そして、もう一つの理由は、『東槎録』に見えず、『日東壯遊歌』にだけ書かれている内容の大部分が金仁謙の私的な思い出話であるという事実である。

おわりに

本稿では、天理大学附属天理図書館所蔵『東槎録』が第11次（癸未／宝暦明和度）通信使の使行日記であることを明らかにし、それが金仁謙の著になる可能性のきわめて高いことを論じた。さらに、同じく金仁謙の手になる『日東壯遊歌』との比較を通して、両書が相当に深い関わりを持つ関係にあることを述べた。

両書を相互補完的に考察することで、日朝外交の最前線にあった金仁謙の周りで何が起こっていたのかをより詳細に知ることができるであろうし、ともすれば全文ハングルで書かれているという一点に関心が集中しがちであった『日東壯遊歌』の、歴史資料としての価値を再確認することができるであろう。両書の内容に関する詳細な比較分析作業については今後の課題としたい。

ここでは最後に、『日東壯遊歌』の言語史資料としての可能性について触れておこう。『日東壯遊歌』第二、癸未十一月二十九日条に、通詞から言葉をならったのか、倭人の女らが一行の一人に対して「*요선사람*/チョソンサラム」と呼び立てる、というくだりがある（高島訳本、187頁）。「チョソン」は「朝鮮」、「サラム」は「ひと」を意味する固有語である。漢文で書かれた『東槎録』はこの部分を「蛮女招我人曰、朝鮮人」とのみ表記しているので、倭人の女（蛮女）が「チョソンサラム」と呼んだのか、「チョウセンジン」と呼んだのかは区別できない。彼女たちが通詞から言葉をならったのか云々、という記述は『東槎録』には見えない。仮にあったとしても漢文で書かれていては、読者には何のことか理解できないであろう。

このように音を文字であらわす際にハングルは大きな力を発揮してくれる。漢文の『東槎録』とハングルの『日東壯遊歌』が、今後歴史学のみならず、言語学等においても、両書ともにそろったかたちで活用されることを期待したい。

〈参考文献〉

1. 史料・校注／訳註

1. 李長載編『青丘稗説』（成均館大学校尊経閣所蔵。請求記号 B06B-0045）
2. 『国訳海行摠載』全12冊（1967年、民族文化推進会）
3. 沈載完校注（1984）『日東壯遊歌・燕行歌（韓国古典文学全集・第10巻）』、教文社（同書は1978年、1980年には普成文化社から発行されていた。）（原載『語文学』17、19、20、韓国語文学会、ソウル、1967～69年。）
4. 李民樹訳注（1976）『日東壯遊歌』、探求堂、ソウル

5. 李相宝訳注（1991）「日東壯遊歌」、『18世紀歌辞全集』所収、民俗苑、ソウル
6. 宇野秀弥訳（1979）「壬辰録・日東壯遊歌」、『朝鮮古典文学試訳 7』
7. 高島淑郎訳註（1999）『日東壯遊歌——ハングルでつづる朝鮮通信使の記録』、平凡社東洋文庫

2. 著書

1. 池内敏（1999）『唐人殺しの世界——近世民衆の朝鮮認識——』、臨川書店
2. 辛基秀・仲尾宏（1994）『善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使 第七卷 甲申・宝暦度』、明石書店
3. 李成厚（2000）『日東壯遊歌研究』、蜚雪出版社、ソウル。（효성여대 대학원 박사학위논문、1988）

3. 論文(韓国)

1. 具智賢（2005）「『癸未隨槎録』에 대한 재검토——작가와 사행록으로서의 의미를 중심으로——」『東方学志』 131
2. 金国昭（1976）「日東壯遊歌 研究——作家를 中心으로——」『明知語文学』 8
3. 金成大（1977）「日東壯遊歌 研究——外国行 使臣으로서의 海東선비의 衿持」碩士學位論文（延世大）
4. 金宗大（2003）「日東壯遊歌研究——時代的 背景과 作者의 意識을 中心으로——」、鄭雲燁・金宗大・白正基共著『国文学研究資料比較論著』 35、巨山
5. 박태준（1991）「癸未通信使（1763）의 日本觀——金仁謙의 〈日東壯遊歌〉와 朴趾源의 〈虞裳伝〉을 中心으로——」『日本評論』 4（秋冬号）
6. 배수영（1997）「趙曦의 海槎日記를 통해 본 日本認識」碩士學位論文（誠信女子大）
7. 蘇在英（1988）「18世紀의 日本體驗——『日東壯遊歌』를 中心으로——」『論文集』〈崇実大〉 18
8. 李成厚（1986）「趙曦과 金仁謙의 対日觀 研究」『金烏工科大学校論文集』 7
9. ——（1991）「日東壯遊歌의 異本 研究」『金烏工科大学校論文集』 12
10. ——（1992）「金仁謙의 歷史認識」『韓國学論叢』、香山卞廷煥博士華甲紀年論叢刊行委員會
11. ——（1996）「日東壯遊歌와 海槎日記의 比較研究」『金烏工科大学校論文集』 17
12. 李東燦（1996）「癸未 通信使行 記録의 장르 選擇——「海槎日記」과 「日東壯遊歌」를 中心으로——」『韓國文学論叢』 18
13. 林榮沢（1994）「癸未通信使와 実学者들의 日本觀」『創作과批評』 1994秋号
14. 張德順（1961）「紀行 文学으로서의 「日東壯遊歌」」『国語国文学』 24
15. ——（1962）「日本紀行의 日東壯遊歌」『現代文学』 95

16. 崔相殷 (1995) 「〈日東壯遊歌〉와 士大夫歌辭의 變貌」 『比較語文学会誌』 6
17. 河宇鳳 (1986) 「새로 발견된 日本使行録들——『海行摠載』의 보충과 관련하여——」 『歴史學報』 112
18. ——— (1989) 「元重拳의 和国志에 대하여」 『全北史學』 11・12
19. ——— (1994) 「元重拳의 日本認識」 『李基白先生古稀記念韓國史學論叢』 下、一潮閣
20. 洪西杓 (1984) 「日東壯遊歌에 나타난 對日觀」 碩士學位論文 (東國大)

4. 論文(日本)

1. 伍躍 (1998) 「宝曆・明和年間の朝鮮通信使——十八世紀後期朝鮮士大夫の世界觀——」 『東アジア研究』 21
2. 郷司泰仁 (2003) 「宝曆度朝鮮通信使の画員金有声について」 『青丘學術論集』 23
3. 佐竹昭 (1995) 「宝曆14年朝鮮通信使の鹿老渡 (広島県安芸郡倉橋町) 寄港をめぐる」 『地域文化研究』 〈広島大学総合科学部紀要〉 21
4. 那波利貞 (1967) 「明和元年の朝鮮国修好通信使団の渡来と我国の学者文人との翰墨上に於ける応酬唱和の一例に就きて」 『朝鮮學報』 42
5. 三宅英利 (1977) 「宝曆朝鮮信使考」 『北九州大学文学部紀要』 開学30周年記念号 (同 (1986) 『近世日朝關係史の研究』 文献出版、第四章に「家治政權の成立と通信使」として改編収録)
6. 李元植 (1977) 「明和度 (一七六四) の朝鮮国信使——成大中との筆談・唱酬詩卷を中心に——」 『朝鮮學報』 84